環境・農村開発・女性自立

－ 種まき、苗木移植 － 雨期を迎えて、忙しくなったアグロフォレストリー現場

＜スプ村・フィタック村の高原野菜作り＞

6月中旬、雨の中集まった18名が、高原野菜のモデル地区であるゴメロ村のウダン氏から、播種の細かいノウハウを学びました。無農薬・有機栽培理論の方は同村のロネル氏が担当しました。

パイナップルプランテーションに土地を貸さない選択をした住民たちの試行錯誤はまだ始まったばかりです。（日本国際協力公益財団助成）

＜移植を待つキナマンガン村のゴム苗木＞

今回の訪問時、キナマンガン村では育苗場を訪ねました。日陰ネットが外され、移植を待つ濃い緑色の苗木の中に、長時間のトラック搬送によるダメージから十分回復していない黄緑色が混じっていました。アグロフォレストリーで、必ず予算に含めるShading House(日陰小屋)経費。改めてこの「養生」が、苗木の枯死率を下げ、数年後の収穫にも影響する大切な過程であることを知りました。キナマンガンの受益者は15名。雨期の今、移植作業に精出していることと思います。（三井物産環境基金助成）

＜ゴムノキ事業のタラヒク村を町のモデルに＞

1年前に植えた25haのゴムの苗木が順調に生育しているタラヒク村では、今年はHANDS資金(FY基金)で、10ha20世帯で事業を実施しています。このタラヒク村のあるスララ町では、モロとティボリ民族が協力して組合を結成し、環境保全、収入向上を目指すこの村をモデル地区にしたいと、7月19日の感謝祭には、町長や議員、バランガイキャプテンも参加しました。

セブ湖最大の島の生態系回復プロジェクト

レイクセブ町観光課スタッフのティボリ民族ロイ君の案内で急坂を登ること20分。湖を見下ろすティバウ島の頂上は、一面コーン畑になっていました。唯一熱帯の生態系が残っていた島も、入植者の増加で本土の農地を失ったティボリ民族によって急速に耕地化が進みました。竹や在来種の植林と、収入源となる果樹苗育成・淡水魚ティラピアの養殖を組み合わせた島の生態系回復事業は、PFPや町と協働して実施中です。（イオン環境公益財団助成事業）

ナバルタビ織チーム、政府機関 DTI に登録

松尾基金による「織の家」は、ビラーンの民族衣装、アメリカのタペストリー、日本の夏帯等の需要に支えられてナバルタビ織生産と技術継承の拠点となっています。数年前、ビラーン民族牧師ノノバートが従弟のスヌーリアの協力で始めた事業は、織手3名、研修生3名、今年雇用した元カレッジ奨学生ジュディスを加えた7人のチームとして、この7月、DTIに登録しました。

トゥヤンにMULAN展示販売所完成

—モロの村の自主財源創出事業3年目—

今年は、トゥヤン村MULANのバニグ製品販売所建設を支援しました。多種類のバッグや篭などが飾られていました。国道に面しており、多数の客が見込めます。（WE21ジャパンみどり助成）